The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	臨床老年行動学講座での学び ： 臨床での学びの原点を振り返る
Author(s)	平井, 啓
Citation	生老病死の行動科学. 2019, 23, p. 9-10
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/73609
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

生老病死の行動科学 2019 年　第 23 巻　pp.9 - 10

寄稿
Contributed Article

臨床老年行動学講座での学び
—臨床での学びの原点を振り返る—

Learning experiences in the clinical psychiatry and geriatric behavioral science laboratory

（大阪大学大学院　人間科学研究科）　平井　啓
（Osaka University, Graduate School of Human Sciences）　Kei Hirai

1.　臨床老年行動学講座の開設

1993 年の 4 月に「臨床老年行動学講座」（当時は小講座制）が開設され，そこに一期生として所属することになった。行動学系に進学を決めた学生たちの中から，所属講座を選ぶことになったのであるが，全く新しい講座であるのにもかかわらず，最初の講座の概要を柏木先生から直接話しをきけたこともあって，最も人気のある講座となり，たしか 11 名の学生が所属を希望した。しかし，教授の柏木先生のみの講座としてスタートしたため，11 名の学生すべてを受けいれるわけにはいかず，5 名くらいを定員ということで，選抜が行われることになった。選抜といっても，もう一度しっかり考えて，後日，所属志望者は集合するということになっていたと思う。その間，学生の間では，「だれだれが別の講座に移ったらしい」といった話がされ，なんとか所属したい学生同士のチキンレースのようなことが行われていた。結果的に，真面目に自分の適性を考えたというよりも，比較的図太い神経だったと思われる 5 名が，「臨床老年行動学講座」の第一期生となった。

私が，「臨床老年行動学講座」に所属したいと考えた理由は少々複雑である。もともと，実践的な心理学に関することがしたかったために，臨床心理学を学ぶことに興味があった。一方で，人間科学部に一回生として入ったときから，当時の同期の間では，心理学実験を乗り越えて初めて分属できる「行動学系」は憧れであった。当時は，臨床心理学は教育心理学講座の中にあり，教育学系に所属する必要があった。つまり，臨床心理学のようなことがやりたいが行動系に所属したいと考えていたところ，行動学系に臨床系の新しい講座ができるということを聞いたのである。この時点で，自分の中で，この新しくできる講座に所属したいという明確な行動意図が形成されることとなった。実は，その新しい講座の教授として終末期医療やホスピスの専門家である柏木先生が来られるということを知ったのはその後のことであった。

講座に入ってから，最も印象的な学びの場は，淀川キリスト教病院での実験実習であった。病院でホスピスの医師とともに文献を読んだり，議論を行ったり，カンファレンスに参加したりするなかで，一人ずつ，ホスピス医としての柏木先生にぴったりくっついて一日過ごすという病院実習を行った。医学的なことはほとんどわからない我々学生にとって，カンファレンスの会話についていくこともとても難しいことであったが，実際に，看取りの場面など，人生の最も大きな局面での人々のコミュニケーションを目の当たりにすることができた。

もう一つの臨床老年行動学講座での学びは卒論であった。ほぼ一年間，一つのテーマについて一人で取り組むというのはとてもやりがいのあることであったと思う。同時に大学院への進学も決め，その試験勉強をしながら，大学の研究室で過ごす時間はとても充実したものであった。この年の最大の出来事は，ちょうど卒論の提出日の 2 日前に阪神大震災が起こったことである。臨老の研究室では，一人の同級生が卒論のために徹夜をしていて，地震のときにパソコンが壊れないように必死にそれを支えていたそうである。また，明石に住んでいた同期は，交通機関が寸断されたため，大学に残っていたデータで仮提出し，後日，完成版を兵庫県の山の中の迂回経路を通って，提出に来たのを受け取って整版すると

いったことをしていた。このような経験で，同期とは戦友のような感じであった。

翌年，大学院に進学した。この頃は，臨床的な何かをしたいという思いが強かったため，柏木先生にお願いして，1 年間，淀川キリスト教病院での精神科外来の陪席の実習をさせてもらうことができた。精神科での実習は，統合失調症，うつ病，神経症（今で言う適応障害や不安症）の患者さんたちを 1 年間という時間の中で，さまざまな変化も含めてじっくり観察させてもらうことができた。また，当時は，今の臨床心理学研究分野の前身である教育臨床心理学講座ができたころで，合同でケースカンファレンスなどを行ったり，教育臨床心理学の大学院生の先輩方と精神分析の研究会を行ったりといったことをしていた。しかし，研究でいくのか，臨床でいくのかを選ばなくてはいけなくなり，M1 の終わり頃に，研究を中心にやっていくという選択をし，そのまま，前期課程を修了した半年後に，臨床老年行動学講座の助手となり，現在まで続く大学教員の道にはいることになったのである。

2. 「公認心理師プログラム」での学び

ここから現在までの間は，大学教員としてさまざまなことを経験したが，2018 年 4 月より，再び人間科学研究科の教員として働くこととなった。現在の主担当は，今年度第 1 回目の国家試験が行われた心理の国家資格である公認心理師の資格取得過程である「大阪大学公認心理師プログラム」の企画・運営業務である。この業務での私の最大のミッションは，トータル 450 時間という長時間にわたる心理実践実習という実習事業の運営である。医療機関を中心に実習先の開拓から，実習先との調整，実習先を巡回し，実習生を指導するといったことを行っている。この実習プログラムを作っていくにあたって，最もイメージしたのは，先述の淀川キリスト教病院ホスピスでの実習と精神科での陪席の実習である。心理相談室で実際のケースを担当することも重要であるが，ホスピス・緩和ケア病棟という「いのち」の重さを最も感じることができる空間で過ごすことや，さまざまな精神疾患の患者さんたちを直接見ておくことが何よりも重要な学びになると考えた。本年度は経過措置の学生も含めて 11 名の実習生が，医療のみならず，産業，福祉，教育，司法の公認心理師に求められる 5 領域での実習を行うことができた。また，2010 年より非常勤で心理職としての業務を行っている市立岸田市民病院においては，現場の実習指導者として実習生を受け入れて，自分自身の実践のなかで実習指導を行った。

このような病院で実習指導を行うということは，国家資格ができる 2 年前までは，それを自分が行うことになるとは全く想定していなかった。この業務を行って思い出したことは，臨床老年行動学講座での自分自身の実習の体験である。自分はあのとき何を考えながら病院での実習を行っていたのか？何を学んだのかを思い出して，それを実習生に伝えるようにした。1 人の実習生が，私の業務である職員カウンセリングや認知症ケアチームでの実習の後，最後の一日を緩和ケア病棟で緩和ケア医にぴったりくっついて過ごすことになった。1 日の実習であったが幸運にも看取りの場面に同席することができた。彼女はとても深い学びであったと言い，さらに緩和ケア医と 3 人で振り返りを行ったときに，自分自身のホスピス実習のときの経験した看取りの体験を思い出し，あらためて実習での看取りの経験から何が学べるのかを議論することができた。その議論の結論は，「人間は死ぬ存在であるということを改めて確認できることで，それを基準にすることで具体的に問題解決を考えることができるようになること」となった。

このような学びを学部生，大学院生の段階で得ることができたのはこれまでの人生と仕事のキャリアの形成においてとても大きいことであった。普通の人からすれば大変なことでも，「死」という価値の参照点から考えれば許容できることも多くなると感じる。また，残された時間が短かったとしたらそれをどう使うか？という観点から問題解決を具体的に考えられるようになったと思う。そして，重要なことは，われわれにはさまざまなバイアスが常に生じるため，学び続けることでこの価値の参照点を調整し続けなければいけないということである。今後もこの学びの原点を忘れないように学び，そしてそれが学べるような環境を作っていきたい。